

## 原著論文

# フィンガーペインティングにおける用紙サイズの検討

中京大学心理学部 伊藤 早希  
中京大学心理学部 馬場 史津

Paper sizes for finger painting

ITO, Saki (School of Psychology, Chukyo University)  
BABA, Shizu (School of Psychology, Chukyo University)

This study explores the optimum paper size for finger painting. An experiment was conducted to compare nine university students' finger paintings using two paper sizes. A healthy regression experience scale did not find significant differences between the two paper sizes. The university students were healthy and adjusted their art expression according to the available space on the paper. The interview results showed that the bigger size gave them a feeling of freedom, but it was necessary to make efforts to utilize the available space. However, it was easier to use the smaller paper size for art expression. Many participants discussed their impressions about leaving spaces blank. Some participants worked hard to lose the blank spaces, while other participants left spaces blank in their art expressions. The paper size is an "environment" for the art expression; thus, it is necessary to pay attention to how the blank spaces are used.

Key words: finger painting, paper size, regression effects

## はじめに

フィンガーペインティング (Finger painting : 以下, FP とする) とは, 自分の指や手のひらに直接絵の具をつけて自由に表現する絵画表現技法の一つである (Shaw, 1934 / 1982)。岡田 (2006) によると, FP は「触覚型」と「視覚型」のほぼ中間に位置する特異な表現法であり, 絵画表出以前のプリミティブな感覚運動を「触覚」を媒体として統合し, 「視覚」的な絵画表現へと橋渡しする営みでもある。柔らかな絵の具を手につけるといった触覚を刺激するプリミティブな体験は, 他の絵画表現以上に子どもの空想表現を引き出し (岡田, 2006), 成人においても童心に返り自由に表現する機会となる。伊藤 (2001) は, 現実的な制約から離れ, 自由な表現活動を促すような芸術活動では「自我のための退行」が生じ, 自我に対するエネルギー充填の役割を果たしたり, 感覚や感受性を豊かにするなどの適応的な働きがあると述べている。一方で岡田 (2006) は, 精神科臨床における FP が不必要に治療枠を超えて退行を促進させてしまう可能性を指摘し, 特に大きなサイズの用紙で実施することは, 患者の負担

が大きく, 注意が必要であると述べている。

これまでの FP の研究は, 愛着障害のある母子の心理療法として導入された実践研究 (武藤・辻内, 2013) や, 保育者を目指す学生のイメージワークとして (林, 2011), また, パーソナリティ傾向と表現体験の関連性 (岡本, 2005), FP の表現生成過程を捉える試み (安立, 2018) などがなされている。しかしながら, 表現を支える素材についての研究は少なく, 岡田 (2006) が指摘したような用紙サイズによる体験の違いに注目した研究はみられない。

一般に, 描画法における用紙は描き手にとっての「環境」と考えられ (市来・内藤・金井, 2005), 用紙に対して描き手がどのように内的世界を表現するのかに注目する。用紙が「環境」という側面を持つのであれば, 用紙サイズの違いは描き手の体験に強く影響するのではないかと考えられる。

市来他 (2005) は, 自由画, 木の絵, Feeling picture からなる The Diagnostic Drawing Series を用いて, 用紙サイズによる描画表現の違いを比較した。その結果, 用紙サイズの大・小により使用される色の数は異なるものの, 筆圧や空間使用率といった描画の基本的構造や描画内容は概ね変わらないこ

とが示された。また、仲原・佐渡・鈴木 (2010) は異なるサイズの用紙で実施した風景構成法の研究を報告している。この研究でも、川や山の形態や統合の段階を表す構成型に差はみられず、自身の風景画に対する印象も変わらなかったと報告されている。

これらの研究から、用紙サイズが異なっても、描画の基本的な構造や内容は変わらないと考えられるが、FPの特徴である退行促進作用に影響はないのだろうか。上述したように、岡田 (2006) は精神科臨床において大きなサイズでのFPには注意が必要であると述べている。しかし、健常な大学生にとっては、大きな用紙でのFPが退行を促進し、感覚や感受性を豊かにする体験となる可能性も考えられる。用紙サイズのもたらすFPへの影響を理解することは、FPを目的に合わせて適切に実施することにつながると思われる。そこで本研究では、異なるサイズの用紙を用いてFPを実施し、退行促進作用の違いやそれぞれの用紙サイズにおける体験の特徴について検討することを目的とする。

## 方法

### 1. 対象

参加者募集に応募した大学生9名 (男性: 2名, 女性: 7名) を対象とした。平均年齢は21.22歳 ( $SD=0.63$ ) であった。すべての参加者はFPが未経験であった。

### 2. 材料

四つ切画用紙 (以下、四つ切とする)、八つ切画用紙 (以下、八つ切とする)、絵の具 (ポスターカラー12色: 赤・青・緑・黄緑・深緑・桃・黄・橙・茶・肌色・黒・白)、紙パレット、新聞紙、タオル、エプロンを用意した。エプロンは描画中に絵の具が参加者の服につかないためのもので、着用は希望者のみとした。

### 3. 健康的退行体験尺度

それぞれの用紙の退行体験を数値化するため、川田 (2014) の健康的退行体験尺度を用いた。この尺度では、「時間の感覚がなかった」「思ったまま自由にできた」などの13項目が退行体験を反映することが明らかにされている。各項目は「当てはまらない」～「当てはまる」までの5件法で、13項目の合計得点を健康的退行体験得点として算出した。

### 4. 手続き

FPは個別法で実施し、2種類の用紙サイズ (四つ切、八つ切) を使用して、1人2回行った。複数回実施の順序効果を考慮し、1回目に5名が八つ切、4名が四つ切を使用することでカウンターバランスをはかった。1回目と2回目のFPの間隔は1~2週間とした。

FPを行う前に、手に直接絵の具をつけ、描くことに慣れてもらうウォーミングアップを実施した。その場合の用紙サイズは、その回に使用する用紙サイズと同じものを用いた。FPの教示は岡本 (2005) を参考に「これから手や指を使って自由に描いてもらいます。上手下手はありません。頭で考えすぎずに自由に描いてください。楽しいからハートマークや星マークなど具体的な形を描くのではなく、今どのような感じが、色を眺めてみたりしながら、抽象的に表現してみてください。特に時間制限はありませんので、皆さんが満足のいくまで描いてください。指や手のひらで絵の具の感覚を楽しんでください。絵の具は混ぜても構いません。絵の具が足りなければ補充するので申し出てください。それでは、始めてください」とした。用紙の向きは参加者の自由とした。参加者が用紙に描き始めた時間と終わりまでの時間をストップウォッチで計測した。担当者 (第一著者) は邪魔にならないように配慮しながら、参加者の様子を観察して記録した。

FP終了後、川田 (2014) の健康的退行体験尺度への回答を求めた。次に10分程度を目安にインタビューを行った。1回目の内容は「手を汚すことに抵抗はありましたか」「絵の具の感触はどうでしたか」について質問しながら、FPの感想を尋ねた。2回目のFP終了後のインタビューでは、「前回と比べて何か違いはありましたか」「用紙サイズはどう感じましたか」「どちらの用紙サイズがより没頭・満足できましたか」「FPをやってみてどうでしたか」の質問を設定し、FPについて尋ねた。

### 5. 倫理的配慮

FP開始前に、研究への参加は自由意思であり、作品の写真撮影、会話の録音、個人情報の管理について説明した。また、個人が特定されないように配慮したうえで、作品やインタビュー内容の一部を論文に掲載する可能性があることについても説明し、書面にて同意を得た。

## 結果

### 1. FP 体験について

それぞれの用紙の実施時間は、四つ切では、最も短い参加者が5分5秒、最も長い参加者は31分45秒であった。八つ切では最も短い参加者が6分8秒、最も長い参加者は17分57秒であった。それぞれの用紙の平均実施時間を算出した。その結果、四つ切は11分25秒 ( $M=685.44$  秒;  $SD=509.94$ )、八つ切では9分35秒 ( $M=574.78$  秒;  $SD=241.01$ ) であった。両サイズの実施時間に差がみられるかについて、対応のある  $t$  検定を行ったところ、有意な差はみられなかった ( $t(8)=-.84, n.s.$ )。実施時間では、用紙のサイズに関係なく、1回目の実施時間が2回目よりも長い参加者が7名 (77.8%) であった。

参加者の FP の様子を観察したところ、用紙サイズによって使用された指の本数が異なっていた。四つ切では2本以上の指を使用した参加者が6名 (66.7%) であったのに対し、逆に八つ切では指を1本のみ使用した参加者が6名 (66.7%) であった。

四つ切実施後の健康的退行体験得点の平均は46.60点 ( $SD=8.06$ )、八つ切では47.00点 ( $SD=7.56$ ) であった。それぞれの得点について対応のある  $t$  検定を用いて比較したところ、有意な差はみられなかった ( $t(8)=0.27, n.s.$ )。

インタビュー時の「どちらの用紙サイズがより没頭・満足できましたか」という質問に対して、四つ切と回答した参加者が7名 (77.8%)、八つ切と回答した参加者は2名 (22.3%) であった。「手を汚すことに対して抵抗はありましたか」という質問に対しては、「抵抗はなかった」が6名 (66.7%)、「最初はあったが徐々に慣れた」が3名 (33.3%) であった。

### 2. 用紙サイズについてのインタビューのまとめ

インタビュー内容の用紙サイズに関する回答を中心に Table 1. にまとめた。Table 1. の ~ は1回目に八つ切を用いた参加者、~ は1回目に四つ切を用いた参加者の記録を示した。

また、インタビューをもとに、八つ切・四つ切それぞれのメリット・デメリットについて Table 2. にまとめた。

## 考察

### 1. FP 体験について 退行促進作用の比較

本研究では、四つ切が八つ切りに比べて健康的退行体験得点が高いのではないかと予想していたが、用紙サイズの大小によって得点に有意な差はみられなかった。この結果は、今回の参加者が健康な大学生であり、用紙サイズが変化しても、それに合わせて自らを調節して表現できることを意味しているのではないだろうか。またこのことは、用紙サイズによって実施時間に差がみられなかったことにも示されていると考えられる。

著者らは、八つ切に比べて2倍の面積のある四つ切の実施時間が長くなると予測していた。しかしながら、実施時間に有意な差はみられなかった。一方でFP場面では、四つ切では2本以上の指を使用した参加者が6名 (66.7%) であったのに対し、八つ切では指を1本のみ使用した参加者が6名 (66.7%) という特徴がみられた。

市来他 (2005) は、紙が大きいことは拡張的な表現を許す一方で、構成が散漫にならないためには意識的な自我の関与を必要とすると述べ、これを臨床群のなかで大きい紙に疲弊感を持つものがある理由として挙げている。また近藤 (2011) は、複数のアイテムを描く課題は関連付けの作業が求められ、描き手に負担がかかると指摘している。今回の参加者は健康な大学生であるが、四つ切では描き込みが増える傾向にあり、描き手は八つ切よりも多くの精神的エネルギーを必要としたものと予想される。参加者はそれぞれのエネルギーに見合った時間のなかで、用紙サイズに合わせて指の使い方を変化させ、表現していたのではないかと思われる。岡田 (2006) は、大きなサイズの用紙で実施することは、患者の負担が大きく、注意が必要であると述べている。臨床場面では表現させすぎることへの危険性に配慮すべきであるが、健康な大学生は用紙サイズに合わせて柔軟に関わることができると考えられた。

今回は7名 (77.8%) の参加者が用紙サイズに関係なく、1回目の実施時間が長かった。実施後の感想では、1回目は「何を描けばいいのかわからない」と述べた参加者が多くみられた。今回の参加者全員がFPは初体験であり、また抽象的表現を求めるような教示がなされていたこともあって、「何を描けばいいのかわからない」という戸惑いを生じさせ、

Table 1. 用紙サイズに対する感想

参加者 番号	八つ切	四つ切
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズはこのサイズ（八つ切）を出されたから、これに描けばいいんだと思ったから丁度良かった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>四つ切の方が描きたいものが全部描けるから描きやすい</li> <li>八つ切よりも集中して描けた</li> <li>八つ切は自分にとっては小さいし、思い切って描けないから描き辛かった</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙のサイズは普段から使うようなサイズじゃないから大きいと感じた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全然余白が埋まらなかった</li> <li>大変だけど、四つ切の方が描いていて楽しかった</li> <li>四つ切は運動量が多かったから疲れた</li> <li>運動量が多くて大変だったけど、開放感を感じることができた</li> <li>四つ切は余白を埋めたかったからより没頭できた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙のサイズは丁度よかったが、もっと大きい紙に描きたいと思った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>四つ切は出された時の威圧感がすごかった</li> <li>余白が多いから埋めなきゃと考えてしまった</li> <li>用紙が大きいと描く動きも自然と大きくなるからスポーツに近い感じで達成感が得られた</li> <li>前回よりも考えずに描けた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙のサイズは丁度よかった、FPをやったことがないから、これが普通のサイズなんだと思った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙が大きいから何を描こうか迷った</li> <li>絵のサイズは八つ切でも入るサイズで余白を埋めようと思ったけど、描くものが思いつかなくて無理だと思った</li> <li>あまり絵を描く機会がないから、ぱっと出されて描きやすい八つ切のほうが好き。でも物を大きく描くことが好きで思い切り描けるから四つ切の方が描いていて楽しかった。色も全部使うことが出来たし、自由にやりたいこと描けたから八つ切の時より満足している</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズは丁度よかった、出された用紙に描けばいいんだと思った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>四つ切の方が思い切り描けた。もっと色を混ぜてこうしようとアイデアがどんどん出てきた</li> <li>(八つ切の時の絵を見て) こっちは美術作品みたいにきれいに描いてしまった</li> <li>中央の絵を描き終わった後、余白を埋めたいと思ってどんどん思いついたものを追加していった(四つ切)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>八つ切の方がすぐ余白を埋めることができるから描きやすかった</li> <li>もう一回描くとしたら八つ切のほうがいい。物足りないくらいが丁度いいと思った。描くことが多いと描かなきゃいけない……ってなるから大変だと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズは大きいと感じた</li> <li>余白を埋めようと思っていたけど、描ききれいなと思って途中でやめた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>八つ切の方が、余白が埋めやすい。四つ切は余白を埋めなきゃと感じて描いていたけど、八つ切はすんなりと余白を埋めることが出来た</li> <li>開放感を感じることができたのは四つ切だけど、埋めるのが大変だった</li> <li>四つ切は初回だったということもあり、何を描けばいいか考えてしまったが、八つ切は、無意識的に描くことができた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初はサイズが大きいなと感じて、余白を埋めることができるかを気にしていたが、途中から何も考えずに没頭していた</li> <li>描いていくうちに用紙サイズが小さいと感じた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズはちょうどよかった</li> <li>大きいとどこに何を描こうか悩んだけど、八つ切はすんなりと描くことが出来た</li> <li>描いていて楽しかったのは四つ切だけど、描きやすいのは八つ切だと感じた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズは大きいと感じた</li> <li>余白は埋めようと思っていたけど、描くのが大変だった</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙が小さくなったから、描く種類を減らしてまとまりのある絵を描こうとした</li> <li>絵として好きなのは八つ切の方で、描きやすかったのは四つ切の方だった。指だと太くてうまく描けないから、用紙が大きい方が思い切り描けてよかった</li> <li>何も考えずに描けて、たくさんの種類を描けるから四つ切の方が楽しかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>用紙サイズは普通だと感じた</li> <li>紙がもっと大きければのびのびと描けるだろうなあと思った</li> <li>いっぱい描けたから楽しかった</li> </ul>

Table 2. 八つ切・四つ切のメリット・デメリット

	八つ切	四つ切
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的に丁度いいサイズ</li> <li>・余白をすぐに埋めることができる</li> <li>・指一本でも十分にかけるサイズ</li> <li>・物足りないくらいのサイズが描いていて丁度いいと感じることができる</li> <li>・全体を見渡しやすい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・描きたいものが全部描くことができる</li> <li>・思い切り描くことができる</li> <li>・開放感が得られる</li> <li>・始めは大きいと感じるが、描いているうちに小さいと感じるようになる(没頭している)</li> <li>・自然と描く動きが大きくなるため、スポーツに似た達成感を得ることができる</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い切り描くことができない</li> <li>・指で描くため、小さいものを描くことが難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余白が埋まりにくい</li> <li>・埋めなきゃいけないと考えてしまう</li> <li>・エネルギー量が多いため、疲れる</li> <li>・始めに用紙を出されたときに「描ききれかな……」と不安・戸惑いが生じる</li> <li>・最初、白い画用紙の面積が大きいと威圧感を強く感じる</li> </ul>

1 回目の FP 実施に時間がかかったものと思われる。

## 2. 用紙サイズによる体験の違い

### 没頭しやすさ

FP は指や手のひらに直接絵の具をつける。その非日常感が幼い頃の体験を思い出させ、退行促進作用をもたらす一方で、手が汚れることへの抵抗感も生じさせる。本研究では、手が汚れることに対して抵抗があった参加者は 3 名 (33.3%) であったが、その 3 名とも描いていくうちに「慣れて気にならなくなった」と回答していた。また、「指で絵を描くことが普段ないため、新鮮で楽しかった」という回答もあり、手が汚れることの意識が徐々に薄れ、FP に没頭することができたと思われる。

本研究では、四つ切の方が没頭できたと回答したのは 7 名 (77.8%)、八つ切の方が没頭できたと回答したのは 2 名 (22.3%) であった。四つ切の方が没頭できた参加者が多かった理由として、主に二つの理由が考えられる。まず、FP は指で絵を描くため、必然的に描く線は太くなる。用紙サイズが大きいと描く線が太くなくても、細かい部分を気にすることなく思い切り描くことができるため、四つ切の方が没頭できたのではないだろうか。

二つ目は、余白を埋める作業が没頭を促した可能性である。Figure 1. は参加者 の四つ切作品で「埋めるのが大変だったけど、四つ切のほうが楽しかった。八つ切よりも余白を埋めたいと思ったから、より没頭できた」と述べている。参加者 は八つ切でも抽象的に線を重ねる表現がみられたが、用紙サイズが大きくなることで「埋めたい」という気持ちが強くなり、没頭していったものと思われる。



Figure 1. 参加者 の四つ切作品

### 八つ切、四つ切のメリットとデメリット

Table 2. に示したように、八つ切はデメリットも少なく、指一本でも十分に描くことができるため、誰にでも扱いやすい。八つ切は、四つ切ほどの威圧感はないが、指で描くには小さくて描き辛いことがデメリットである。しかし、八つ切はそのサイズの小ささゆえ余白を埋めやすいという利点があり、気軽に FP を楽しめるサイズであると考えられる。

一方、四つ切では、参加者 . . . . のように、絵を大きく思い切り描くことができたから楽しかったという発言が多く見られた。仲原他 (2010) が、大きい用紙ではエネルギーが活性化され遊び心が刺激されると指摘したように、四つ切を用いた FP は、描く絵の大きさや動作が自然と大きくなるため、八つ切よりも運動量が多くなり、描き終わった後に達成感や開放感を感じやすい。また FP は指で絵具を塗るため、筆で描くように細部までこだわって描くことが難しい。参加者からは、用紙サイズが大きければ、指の太い線を活かすことが

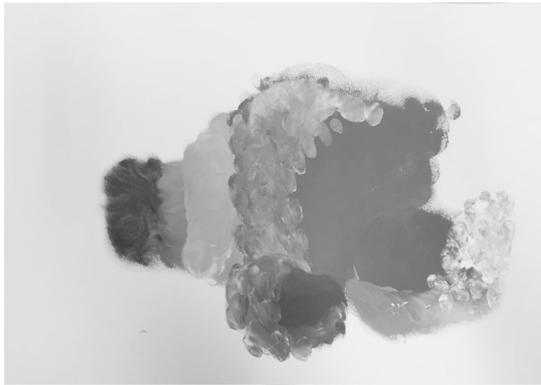


Figure 2. 参加者 の八つ切作品



Figure 3. 参加者 の四つ切作品

でき、のびのびと描くことができるという感想が述べられていた。

しかし、四つ切にもデメリットがみられた。参加者が「(用紙を) 出されたときの威圧感がすごかった」と述べたように、用紙の面積が大きい四つ切のまっさらな状態は、威圧感を与えることがある。これは大きく白い用紙に対し、参加者が「絵を描こう」ではなく、「埋めなきゃいけない」という思考になるためだと考えられる。

仲原他 (2010) でも述べられていたように、与えられた空間全体を埋めようという心性が働く人にとって、四つ切は余白を埋めにくく、埋める行為はエネルギーが消費されるため疲れやすい。このように四つ切は大きく絵を描けるため、楽しいと思うことができる一方で、疲れを感じやすいサイズであると言える。

#### 余白

Table 1. で示したように、インタビューでは余白を埋めることに関する回答が多く聞かれた。本研究では「余白を埋めるように」という教示はしていな

かった。ではなぜ参加者は用紙を見て「余白を埋める」という思考に至ったのだろうか。

一般的に余白とは、文字や事物などオブジェクトが描かれている領域以外の何も記されず、白のまま残っている部分を指す。コラージュ療法では、余白が少ないことは特性不安の高さに関係するとされ、余白があることに安心できず、用紙を埋め尽くす傾向の反映であると考えられる (園田・近藤, 2006)。

Figure 2., Figure 3. は参加者の八つ切作品、四つ切作品である。参加者は、四つ切の中央部分に絵を描いてから周りを描き足していた。参加者は「余白を埋めたいと思ってどんどん思いついたものを追加した」と述べており、用紙が大きいことによって、中央部分以外の空白が気になり、余白を埋めようとする意識が働いたものと思われる。



Figure 4. 参加者 の八つ切作品

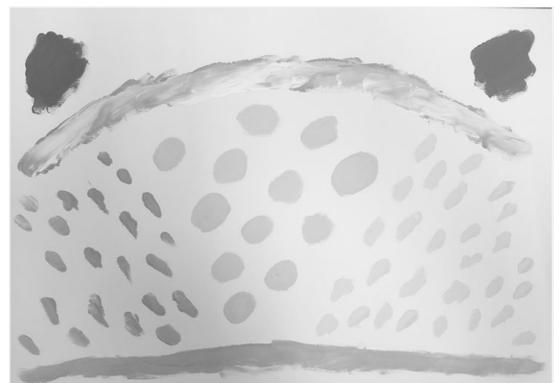


Figure 5. 参加者 の四つ切作品

一方で、四つ切で「余白が多いから埋めなきゃと考えたが、あえて埋めなかった」と述べた参加者もいた。参加者の作品では、八つ切作品 (Figure 4.) よりも四つ切作品 (Figure 5.) の余白が目立っている。日本美術の理解では、東洋絵画における余

白は単なる空白部分ではなく、あえて描かないことによる「空間」の表現だとされている(村田・高橋・大谷, 2016)。これは、日本の文化である書道にも当てはまる。中島(2007)は書の美しさに最も大切なことは白と黒の調和であり、共鳴であると述べ、また服部(2014)も余白の存在が書の表現の幅を拡大させるために不可欠なものであると述べている。書のみならず、余白の割合によって作品の印象は変化する。参加者はあえて残した余白で空間をとり、絵全体のバランスをとっていたのかもしれない。

## おわりに

健常者にFPを実施する場合、用紙サイズは退行促進作用と関連がみられなかった。しかしながら、FP体験や絵の内容にはそれぞれの特徴があることが示された。用紙サイズの特徴は、参加者の「描いていて楽しかったのは四つ切、描きやすかったのは八つ切」との感想に代表される。用紙が大きいことは、「思い切り描けて楽しい」という開放感を生じさせるが、空間のバランスをとり、構成することに努力を要する。一方で、小さい用紙は、作品をまとめやすく、精神的エネルギーの少ない状態に適しているのかもしれない。

どのような描画空間を提供するのかは、FPのみならず描画法全体にかかわる重要な観点である。中井(1970)は用紙に枠づけを加えて手渡す「枠づけ」法において、枠の存在が描画を容易にすると同時に、強制する力を持つこと、逆に枠づけしない白紙は無限に広がる印象を与え、雑多なものが描き込めるがまとまりにくいと述べている。一般的なFPでは枠づけをすることはないが、余白との関連から考えると、八つ切が枠づけされた用紙、四つ切は枠づけのない用紙に対応すると言えるかもしれない。FPの用紙サイズは実施の目的に合わせ、また、参加者の希望を聞きながら選ぶことが重要であろう。

FPは誰でも気軽に楽しむことができる表現技法であるが、未だに研究は少ない。用いる素材が体験に与える影響は大きく、今後さまざまな側面からの検討を重ねていきたい。

## 付記

本論文は平成30年度に提出された中京大学心理学部卒業論文を一部修正したものである。

## 引用文献

- 安立奈歩(2018). 青年を対象としたフィンガーペインティングと切り絵にみる表現生成過程の分析 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 49, 117-127.
- 服部雅(2014). 書における余白の美 表現についての考察 2013年度奈良教育大学修士学位論文, 奈良教育大学学術リポジトリ NEAR, <http://hdl.handle.net/10105/9862> (2018年12月3日).
- 林牧子(2011). イメージワークに伴う個の心理的ダイナミクス 保育者を目指す者の豊かな完成を拓く 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 1, 11-19.
- 市来百合子・内藤あかね・金井菜穂子(2005). The Diagnostic Drawing Series (DDS) における紙のサイズによる描画表現の比較 DDSの日本における適用への模索, 日本芸術療法学会誌, 36(1, 2), 65-71.
- 伊藤俊樹(2001). 「なぐり描き (Mess Painting)」法が個人に及ぼす退行促進作用およびそのプロセスについて 心理臨床学研究, 19(4), 375-387.
- 川田奈於(2014). スクリブル体験を通じた退行状態の検討 健康的退行体験尺度作成の試み 2014年度中京大学心理学部卒業論文, 未公開.
- 近藤孝司(2011). 描画法の描画過程と描画体験に関する一考察 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 11(1), 29-42.
- 武藤安澄・辻内優子(2013). 愛着障害を認めた母親とその子どもの心理療法 子どもの心とからだ 日本小児心身医学会雑誌, 22(3), 189-196.
- 村田晶子・高橋成子・大谷芳夫(2016). 知覚的余白の空間特性: 場の理論に基づく解析 認知心理学研究, 14(1), 21-34.
- 仲原千恵・佐渡忠洋・鈴木壯(2010). 風景構成法における用紙のサイズに関する研究 岐阜大学教育学部研究報告, 人文科学, 59(1), 211-216.
- 中井久夫(1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用 とくに技法の開発によって作られた知見について 芸術療法, 2, 78-90.
- 中島友子(2007). 書道における白と黒の共鳴 近畿福祉大学紀要, 8(2), 113-119.
- 岡田敦(2006). 表現療法技法としてのフィンガーペインティング 精神科臨床における適応とその実際 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 37, 67-88.
- 岡本直子(2005). パーソナリティ傾向と表現体験との関連性についての研究 大学生のグループ・フィンガーペインティングを通して 沖縄国際大学人間福祉研究, 3(1), 55-70.
- Shaw, P.F. (1934) *Finger Painting*. Boston: Little, Brown, and Company. (ショウ, P.F. 深田尚彦(訳) (1982). *フィンガーペインティング 子どもの自己表現のための完璧な技法* 黎明書房
- 園田直子・近藤朗子(2006). コラージュの形式的特徴と自己の関連 久留米大学心理学研究, 5, 13-20.